

「鯨館」の見所は大型海藻標本です。

平成28年地域政策研究センター(地域提案型・後期) 採択課題

課題名: 被災博物館(山田町立「鯨と海の科学館」)の再開支援と住民参加に関するモデル構築

研究代表者 : 総合政策学部 教授 平塚 明

研究メンバー : 湊 敏(鯨と海の科学館)、道又 純(同)

技術キーワード: 地域博物館、市民参加

▼研究の背景・目標

- 山田町立「鯨と海の科学館」(以下、鯨館)は2011年3月11日の津波により、寄贈されたばかりの海藻押し葉標本8万点のほとんどを失った。
- 一部は回収され、各地の博物館で修復、保管されている。(レスキュー標本)
- 鯨館は2017年7月に再開したが、展示収蔵物が絶対的に不足していた。

▼研究の方法

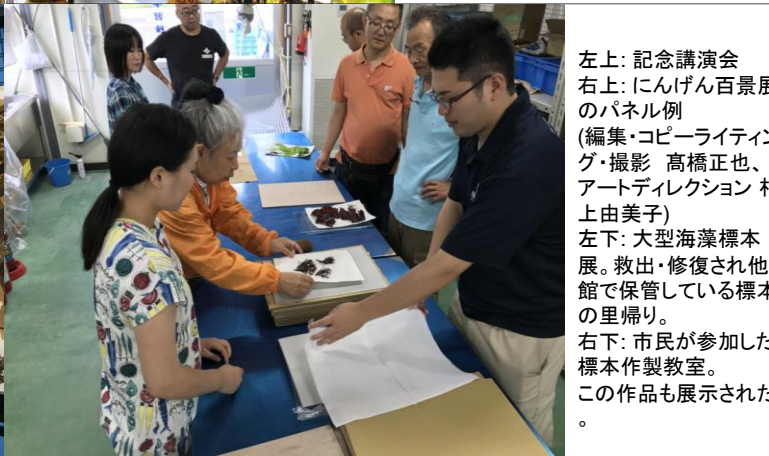
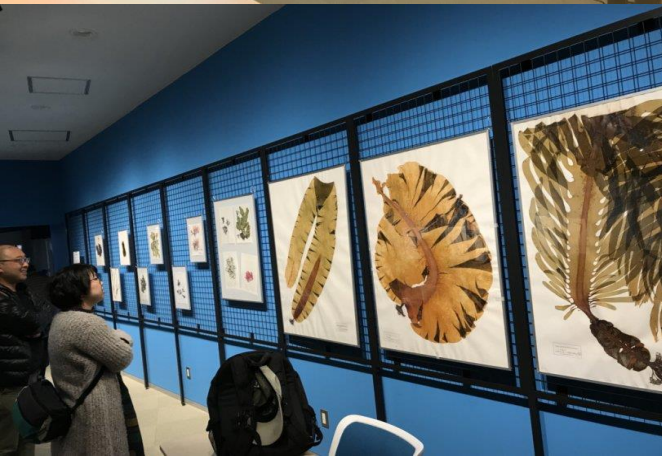
- 二つの企画展を開催する。
- 新たに海藻を集めて標本を作り、展示する「大型海藻標本展」
- 山田町に住まう人たちへのインタビューに基づき、個人史と町の環境や歴史との関わりをパネルと、その人ゆかりの「もの」で表現した「山田にんげん百景展」
- そのいずれにも町民が深くかかわる。

▼研究の成果

- 町民参加の標本作製教室と記念講演会を開催した。
- その標本を、2017年11月8日～2018年1月31日「海中の森ー山田の海藻」(大型海藻標本展)において、一時的に里帰りしたレスキュー標本とともに展示した。
- 四人の町民について作成したパネルを、2017年10月5日～2018年1月31日「山田にんげん百景展」で展示した。しかし、展示すべき「もの」の多くは度重なる津波で失われていることがわかった。
- つまり、災害常襲地帯における博物館活動では、とくに人工的な「もの」に頼らずに、人の記憶や歴史を掘り起こし、表現することが求められる。今回の二つの企画展の方法論はそのヒントとなる。

▼今後の展開

- レスキュー標本のすべてが鯨館に戻ってくる。展示用の大型海藻標本は住民参加で補充する。
- より多様な町民から取材し、百景に近づける。



左上: 記念講演会
右上: にんげん百景展の
パネル例
(編集・コピーライティング・
撮影 高橋正也、
アートディレクション 村上由美子)
左下: 大型海藻標本展。救出・修復され他館で保管している標本の里帰り。
右下: 市民が参加した標本作製教室。この作品も展示された。